石塚喜明先生へ—最後の講義を受けた学生から

松中照夫
（昭和四十六年農芸化学科卒業）

石塚先生、いつかはこの日が確実に来るとは思っていました。しかし、私は先生が一〇〇歳までお元気であると勝手に思いこんでいましたので、突然の訃報に接して呆然としております。

私は、先生の講義を受けた最後の学生です。私が学部移行して憧れの農学部農芸化学科に配属されたのは昭和四十三年（一九六八年）の後期でした。先生は学部長をされておられました。先生の講義を心待ちしておりましたので、一九六八年一月九日に初めて「土壌学I」の授業を受けた時は、ただただ嬉しく、心が躍っておりました。先生の講義を記したノートは、今もなお、私の手許に残っております。当時、全国の大学は、いわゆる大学紛争で荒れた状態でした。しかし、北大はその大学紛争が、まだ本格化しておりませんでしたので、この後期の授業は順調でした。先生の講義は、ここに集まっていらっしゃる皆さんもよくご存じの通り、理路整然として、受講する学生としては、たいへんに分かりやすく素晴らしい講義でした。

その年の冬、土壌学講座か作物栄養学講座で卒業論文研究をしたいという私を含む二年目学生四名で、あらかじめお約束をしていただき、琴似にある先生のご自宅を訪問させてもらいました。「まさに怖いもの知らず」という状況です。ビール瓶とつまみを持参して行きました。これが先生のご機嫌を斜めにさせるとは知らずに、先生のお宅に向かいました。先生の家に招き入れて頂いた時、私たちの持参したものを見て、先生が怖い顔になられたのを感じました。「怖いもの知らず」は、本当に怖いもの知らずでした。しかし、だんだん雰囲気が怪しくなってきた時、助け船を出して下さったのが、先生の奥様でした。あの優しげな笑顔で、「二年目の学生さんが来たなんてホントに久しぶりだから」といろいろとお気遣いをいただき、おもてなしして下さいました。先生は奥様の一言で、優しいお顔に戻られ、ルーマニアで写してきたという写真をたくさん見せて下さいました。もう四十年近く前の話です。

私が三年生になった一九六九年、大学での紛争がひどくなってきました。そのような状況でも、「土壌学II」の講義は四月十六日から始まりました。しかし、これが本当に先生の最後の講義でした。先生が学部長をされていた関係で、紛争にかかわる雑事のために講義が休講になったり、岡島先生が代理で講義されたりしました。石塚先生の講義を受けたかったので、休講は残念で、とても悲しい思いを持ちました。今、私は酪農学園大学で土壌学を講義する立場になっています。ところが、私が休講を告げると学生達は、拍手して喜びます。誰一人として、私の講義が休講で悲しいといっ

てくれる学生はいません。ということは、石塚先生のような判りやすく、興味を引く講義をしていないということです。いつも、石塚先生のような講義をしたいと思っていますが、どうやら私には無理のようです。

四年生になっていよいよ卒業論文研究という時、先生は退官されてしまいました。残念の極みでした。私は、高校時代にちょっとしたことから根釧パイロットファームや根釧原野に興味を持ちました。北海道の大地への思いが憧れになりました。そして北大に入学し、教養部一年生の時、クラス担任であった生物学の渡会彰彦先生にそのことをお話しすると、渡会先生はご親切にも、関係者がいるといわれて、根釧パイロットファームの酪農実習先を紹介してくれました。また同時に、「農学部に石塚という土壌学の大先生がいる、そこでしっかり勉強しなさい」と助言してくれました。私は、その渡会先生のお言葉に従い、農芸化学科に進み、石塚先生の足下にやっとたどり着きました。しかし、残念なことに、そのご指導を直接受けて卒業論文研究を実行することはできませんでした。ほんとうに残念無念の思いでした。もちろん、その後の岡島秀夫先生のご指導で、卒業論文研究を完成させましたので、土壌学講座で学ばせてもらったことへの感謝は大きいものがあります。しかし、石塚先生のご指導を受けられなかったというのは、今でも、多少、残念な思いがあります。

先に申しあげましたように、二年生の時はビール瓶をもって先生のお宅に押しかけるほど、怖いもの知らずでした。しかし、三年生、四年生と時間の経過と共に、先生の偉大さを知っていくと、

先生の側に近づくのも恐れ多いという心境に変化していったのも事実です。というわけで、先生と親しくお話ししたことは、二年生の冬以来、全くありませんでした。

先生から私に声をかけて頂いたのは、私が道立北見農試で長期連輪作試験を担当していた一九八八年の夏（七月二十八日）でした。この伝統ある試験の設計変更を私が願い出た時、当時の宮脇忠土壌肥料科長や砂田喜與志場長が、「それは石塚先生にお聴きしないことにはどうにもならない」ということで、北見農試に中山利彦元場長、星野達三北農会会長とともに、わざわざ来ていただいた時です。その時の私には石塚先生が、学生時代以上に偉大であると感じ入っておりましたので、先生からのご質問にお答えするのが精一杯で、やはり落ち着いてお話をする事はできませんでした。先生の側にいるだけで身震いするほど緊張しておりました。結局、この話し合いの後、北見農試の連輪作試験は、私の提案に基づき、一部、設計変更をおこないました。そして私は担当者から退き、赤司和隆研究員が引き継いでくれました。一九九二年の夏（七月二十一日）には、再び石塚先生と中山元場長そして北大の但野利秋教授が揃ってお見えになり、連輪作試験を担当していた赤司研究員を激励していただきました。石塚先生が北見農試の連輪作試験になみなみならない関心がおありだったのだと、その時、痛感しました。

そんな偉大な先生に、私からお話ができて、その上、ご一緒に並んで記念写真を撮らせて頂いたのは、一九九九年の夏に札幌へおこしになった時でした。私がビール瓶を下げて琴似のご自宅を訪

問してから、三十一年も後のことです。九十歳を過ぎてらっしゃるのに、背筋をきちんと延ばされた先生のお姿は、まさに風格ある大教授でした。ただ、私も年齢が五十を過ぎ、多少は図々しくもなっていたのでしょう、先生に記念写真をお願いすることができました。先生は私のことを覚えていて下さり、「酪農学園大学でもしっかりとお仕事されますように」と激励して下さいました。大変にありがたいことでした。

先生は今、私の手の届かないところで、先に逝かれた奥様とご一緒に、私達を御覧になっていることでしょう。先生が私達に残されたことは私たちの血の中に脈々と生き続けています。先日、北海道新聞に先生の追悼記事が出た時に、先生の講座を受け継いでいる波多野隆介教授が「今の世界の農業は化学肥料をやりすぎたり、農薬をまきすぎたりして環境に悪い影響を与えている。しかし、本来の石塚先生の研究は肥料の無駄を避け、クリーン農業に通じるもの。先生が目指していた「人を幸せにする農学」を北大から発信し続けたい」とコメントされていました。まさに、先生の意志が極めて明確に現在の土壌学講座にまで、脈々と受け継がれていることを実感しました。私はそのことを大変心強く思い、また、嬉しく感じました。私は、先生やその後継者のお一人である岡島先生から教えられたこの考えを支えに、これまで仕事をしてきました。これからも先生の教えを守り、発展させて、北海道の、いや、世界の食料や環境に関わるさまざまな課題解決に力を尽くせる学生達を、世に送り出していきたいと思っています。

先生、どうぞ、いつまでも私たちの背中を押して下さいますように。先生が遠いところに旅立たれていても、先生が見守っていて下さると思うと、私たちは嬉しいのですから。先生、あの優しい奥さまとご一緒に、どうか安らかにお休み下さい。